京都造形芸術大学　比較藝術学研究センター　国際シンポジウム

服を創る 文化を創る

司会
高階秀爾
（大原美術館館長、京都造形芸術大学大学院長）

深井晃子
（京都服飾文化研究財団理事）
「ファッションという文化
ー展覧会の役割」

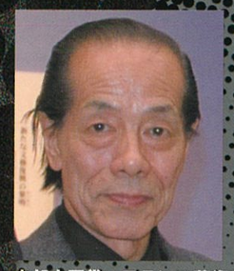
三宅一生（衣服デザイナー）
「Making Process」

オリヴィエ・サイヤール
（パリ国立衣装テキスタイル美術館キュレーター）
「クリエーター、そしてスーパースター
としてのクチュリエ。19世紀から
今日に至るまでの地位の変容」

芳賀徹（京都造形芸術大学学長）

入場無料
聴講を希望される方は
センターHPよりお申し込みください。
http://irccas.kyoto-art.ac.jp
電話、ファックスによる申し込みも受け付けております。
電話　075 791 9167
ファックス 075 791 9181
主催：京都造形芸術大学比較藝術学研究センター

2006年3月11日（土）
13:00-18:00
京都造形芸術大学
春秋座



高階秀爾（たかしな　しゅうじ）

1932年東京都生まれ。
東京大学教養学部教養学科卒、同大学大学院人文科学研究科美術史専攻満期退学。国立西洋美術館主任研究官、東京大学文学部助教授、同大学教授、同大学名誉教授に就任。国立西洋美術館長を経て、現在、京都造形芸術大学大学院長、同比較藝術学研究センター所長、美術評論家、大原美術館館長、東京大学名誉教授、パリ第一大学名誉博士。著書に、『芸術空間の系譜』、『ルネッサンスの光と闇』、『名画を見る眼（正・続）』、『近代美術の巨匠たち』、『歴史のなかの女たち』、近代絵画史』、『ゴッホの眼』、『世界の中の日本絵画』など。藝術選奨文部大臣賞、フランス藝術文藝勲章コマンドール章、紫綬褒章、レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ章、イタリア功労勲章グランデ・ウフィチアーレ章、第58回日本藝術院賞恩賜賞受賞。文化功労賞。

芳賀 徹（はが　とおる）

1932年東京都生まれ。
東京大学教養学部卒、東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専攻博士課程修了。文学博士（東京大学）。東京大学教養学部専任講師、同助教授、同教授、プリンストン大学客員研究員、国際日本文化研究センター教授などを経て、現在、京都造形芸術大学学長、国際日本文化研究センター名誉教授、東京大学名誉教授、岡崎市美術博物館館長。著書に、『詩歌の森へ』、『大君の使節』、『渡辺崋山・優しい旅びと』、『明治維新と日本人』、『みだれ髪の系譜』、『平賀源内』、『絵画の領分』、『与謝蕪村の小さな世界』、『文化の往還』など。『平賀源内』により第三回サントリー学藝賞、『絵画の領分』により大佛次郎賞受賞。フランス政府パルム・アカデミック・オフィシエ勲章、紫綬褒章、明治村賞、京都新聞文化学術賞（比較文学）受賞。

京都造形芸術大学　比較藝術学研究センター　国際シンポジウム

「服を創る 文化を創る」
Making Clothes Making Culture

2006年3月11日（土）　13:00－18:00
京都造形芸術大学　春秋座

主催：京都造形芸術大学　比較藝術学研究センター

定員 600名（入場無料／事前申し込み制）
聴講を希望される方はセンターHPよりお申し込みください。
http://irccas.kyoto-art.ac.jp
電話、ファックスによる申し込みも受け付けております。
電話／075 791 9167　　ファックス／075 791 9181

【交通機関】
JR・阪急・京阪
京都駅・四条河原町・三条京阪から市バス6系統岩倉行き
「上終町京都造形芸大前」下車すぐ
地下鉄
北大路駅から市バス204系統高野錦林車庫行き
「上終町京都造形芸大前」下車すぐ
叡山電車
京阪出町柳駅から叡山電車乗り換え
「茶山駅」下車、東に徒歩10分
※駐車場はありませんので
各種公共交通機関をご利用ください。

京都造形芸術大学　比較藝術学研究センター　国際シンポジウム

服を創る 文化を創る

Making Clothes Making Culture

第一部　13:00〜15:40

13:00〜13:15　開会の辞　芳賀 徹（京都造形芸術大学学長）

13:15〜14:35　基調講演 I

オリヴィエ・サイヤール
（パリ国立衣装テキスタイル美術館キュレーター）

「クリエーター、そしてスーパースターとしてのクチュリエ。19世紀から今日に至るまでの地位の変容」

フランス語の「クチュリエ」は、直訳すると「お針子」となる。ルネッサンスの時代、職人が「芸術家」として社会的認知を得たように、クチュリエもまた、市民社会の成熟とともに創造性をもつ表現者としてのステイタスを獲得するにいたった。その経緯を社会史的考察を交えて解析する。

1967年生まれ。パリ国立衣装テキスタイル美術館学芸員キュレイターとして、マルセイユ・モード美術館やルーブル宮での様々なモード展を企画・実行。『Elle』『Crash』『Jalouse』を中心に、モード誌への寄稿も多数。2003年より、パリ第1大学パンテオン－ソルボンヌ講師。2005年8月、講演会「新たな表現メディア、ファッション展――服、生き続ける服、捨て去られた身体」をワコール本社ビルにて開催。主な展覧会に「La mode au corps（身体のモード）」「Christian Lacroix et le théâtre（クリスチャン・ラクロアと演劇）」「Andy Warhol, the fashion look（アンディー・ウォーホル：ファッション・ルック）」「Décors à corps : La Beauté（身体装飾の美）」「Couturiers superstars（スーパースターのクチュリエ）」「Chorégraphie de mode（モードの舞踏術）」「Karl face à Lagerfeld（カールとラガーフェルド）」「Yohji Yamamoto juste des vêtements（山本耀司：ただ服というだけ）」「Chanel（シャネル）」など。

14:40〜15:40　基調講演 II

深井晃子（京都服飾文化研究財団理事）

「ファッションという文化―展覧会の役割」

1960年代、社会的・文化的に興味深い広がりを見せ、活発なエネルギーを発散していくファッションは、20世紀のヴィジュアルアートの魅力ある一分野として注目される。新たな視点からのファッション展が、アートの中心として世界的な求心力を持つようになったニューヨーク、メトロポリタン美術館などで開催されていく。日本のファッション展の嚆矢は、三宅一生氏らを招聘し、1975年京都国立近代美術館で開催されたＮＹメトロポリタン美術館の「現代衣服の源流展」。これを契機に生まれた京都服飾文化研究財団は、京都からファッションという世界共通の言語をメディアとして、ファッションの文化芸術としての側面を照射する展覧会を世界に発信している。ファッション展の意義と今後を考える。

京都服飾文化研究財団理事／チーフキュレーター、静岡文化芸術大学大学院教授。お茶の水女子大学大学院修士課程修了、パリ第４大学（ソルボンヌ）へ留学（美術史）。キュレーターとして「モードのジャポニスム」、「身体の夢」、「COLORS」等ファッション展を企画開催。展覧会はパリ、ＮＹなどの美術館へ招聘され国際的な評価を受けた。大学でも教鞭をとり、専門領域は服飾文化論、芸術文化政策。フィールドワークとしてパリ、ミラノコレクションを20年以上観察。新聞雑誌等への寄稿、テレビ出演など多数。受賞は1999年度ジャポニスム学会特別賞ほか。主な著書に「ジャポニスム イン ファッション」平凡社 1994、「ファッションの世紀　共振する20世紀のファッションとアート」平凡社 2005など。

15:40〜16:00　休憩

第二部　16:00〜18:00

デモンストレーション

三宅一生（衣服デザイナー）

「Making Process」

三宅一生が現在A-POCを通じて行なっているのは、コンピュータで言うならばチップをひとつひとつつくっていくような作業、つまり、糸をつくり、新しい技術を見つけながら、新しい工程を生み出していく、という作業である。「服づくり」の概念の変革に挑み続ける三宅一生自らがそのプロセスについて語る。

1970年三宅デザイン事務所設立。73年よりパリコレクション参加。「一枚の布」の考え方を基本に、身体と、布そして衣服との関係を追及し続けている。93年スタートしたプリーツプリーズは機能と汎用性をかね備えた現代生活のための衣服。98年からは藤原大はじめ新チームと共にA-POC（エイポック：A Piece of Cloth）の研究に取り組み、一本の糸が服になるまでの新しいプロセスに挑戦している。2004年三宅一生デザイン文化財団発足。2005年第17回高松宮殿下記念世界文化賞を彫刻部門にて受賞。現在は、佐藤卓氏や深澤直人氏らと共に、翌2007年春に六本木にオープンする「21_21 DESIGN SIGHT」の準備中。

パネル討論　深井晃子　オリヴィエ・サイヤール　三宅一生　高階秀爾　芳賀徹

17:45〜18:00　閉会の辞　高階秀爾（大原美術館館長　京都造形芸術大学大学院長）

18:00　閉会

Photographer : Marcus Tomlinson　©2004 MIYAKE DESIGN STUDIO

©京都服飾文化研究財団、畠山直哉撮影

創り手から届けられると同時に身体の一部となる衣服は、絵画や文学など、享受する側との距離を保ちながら客体として存在するメディアと異なり、我々にとってもっとも身近な文化であり、同時に、社会における我々の自己意識の変幻を可能にする表現手段でもあります。しかし、身近な存在であるがゆえに、我々がその創造性を認識するに到るまで、多くの歴史的淘汰を必要としてきたのもまた事実です。比較藝術学研究センターは、京都服飾文化研究財団を率いる深井晃子氏、パリ国立衣装美術館のキュレイターのオリヴィエ・サイヤール氏、そして「服づくり」の概念を変革しつづけてきた三宅一生氏を迎え、現象としての服飾文化の社会的広がりを検証します。コーディネーターは本学大学院長の高階秀爾、本学学長の芳賀徹がつとめます。